森鷗外作品集

第三巻

昭和出版社

森鷗外作品集第三巻

昭和四十年十月三十日発行

定価三百八十円

著者　森鷗外

発行者　八木敏夫

印刷者　河野見木夫

発行所　昭和出版社

東京都千代田区神田神保町一ノ四五

第三卷　目　次

青年……三
食堂……一九三
田楽豆腐……二〇三
蛇……二二三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

森鷗外作品集

第三巻

青年

壹

小泉純一は芝日蔭町の宿屋を出て、東京方眼圖を片手に人にうるさく問うて、新橋停留場から上野行の電車に乗つた。目まぐろしい須田町の乗換も無事に濟んだ。扨本郷三丁目で電車を降りて、追分から高等學校に附いて右に曲がつて、根津權現の表坂上にある袖浦館といふ下宿屋の前に到着したのは、十月二十何日かの午前八時であつた。

此處は道が丁字路になつてゐる。權現前から登つて來る道が、自分の辿つて來た道を鉛直に切る處に袖浦館はある。木材にペンキを塗つた、マツチの箱のやうな擬西洋造である。入口の鴨居の上に、木札が澤山並べて嵌めてある。それに下宿人の姓名が書いてある。

純一は立ち留まつて名前を讀んで見た。自分の捜す大石狷太郎といふ名は上から二三人目に書いてあるので、すぐに見附かつた。赤い襷を十文字に掛けて、上り口の板緣に雑巾を掛けてゐる十五六の女中が、雑巾の手を留めて、「どなたの所へ入らつしやるの」と問うた。

「大石さんにお目に掛りたいのだが。」

田舍から出て來た純一は、小説で讀み覺えた東京詞を使ふのである。丁度不慣な外國語を使ふやうに、一

語一語考へて見て口に出すのである。そして此返事の無難に出來たのが、心中で嬉しかつた。

雑巾を掴んで突つ立つた、ませた、おちやつぴいな小女の目に映じたのは、色の白い、卵から孵つたばかりの雛のやうな目をしてゐる青年である。薩摩絣の袷に小倉の袴を穿いて、同じ絣の袷羽織を着てゐる。被物は柔かい茶褐の帽子で、足には紺足袋に薩摩下駄を引つ掛けてゐる。當前の書生の風俗ではあるが、何から何まで新しい。これで昨夕始めて新橋に着いた田舍者とは誰にも見えない。小女は親しげに純一を見て、かう云つた。

「大石さんの所へ入らつしつたの。あなた今時分入らつしつたつて駄目よ。あの方は十時にならなくつちやあ起きて入らつしやらないのですもの。ですから、いつでも御飯は朝とお午とが一しよになるの。お歸りが二時になつたり、三時になつたりして、それからお休みになると、一日寐て入らつしつてよ。」

「それぢやあ、少し散歩をしてから、又來るよ。」

「ええ。それが好うございます。」

純一は權現前の坂の方へ向いて歩き出した。二三歩すると袂から方眼圖の小さく折つたのを出して、見ながら歩くのである。自分の來た道では、官員らしい、洋服の男や、角帽の學生や、白い二本筋の帽を被つた高等學校の生徒や、小學校へ出る子供や、女學生なんぞが、ぞろぞろと本郷の通の方へ出るのに擦れ違つたが、今坂の方へ曲つて見ると、丸で往來がない。右は高等學校の外圍、左は角が出來たばかりの會堂で、その傍の小屋のやうな家から車夫が聲を掛けて車を勧めた處を通り過ぎると、土塀や生垣を繞らした屋敷ばかりで、其間に綺麗な道が、ひろびろと附いてゐる。

廣い道を歩くものが自分ひとりになると共に、此頃の朝の空氣の、毛髮の根を緊縮させるやうな澁みを感じた。そして今小女に聞いた大石の日常の生活を思つた。國から態々逢ひに出て來た大石といふ男を、純一は頭の中で、朧氣でない想像圖にゑがいてゐるが、今聞いた話は此圖の輪廓を少しも傷けはしない。傷けないばかりではない、一層明確にしたやうに感ぜられる。大石といふものに對する、純一が景仰と畏怖との或る混合の感じが明確になつたのである。

坂の上に出た。地圖では知れないが、割合に幅の廣い此坂はSの字をぞんざいに書いたやうに屈曲して附いてゐる。純一は坂の上で足を留めて向うを見た。

灰色の薄曇をしてゐる空の下に、同じ灰色に見えて、しかも透き徹つた空氣に浸されて、向うの上野の山と自分の立つてゐる向うが岡との間の人家の群が見える。ここで目に映ずる丈の人家でも、故郷の町程の大さはあるやうに思はれるのである。純一は暫く眺めてゐて、深い呼吸をした。

坂を降りて左側の鳥居を這入る。花崗石を敷いてある道を根津神社の方へ行く。下駄の磬のやうに鳴るのが好い心持である。剝げた木像の据ゑてある隨身門から内を、古風な瑞籬で圍んである。故郷の家で、お祖母様のお部屋に、錦繪の屏風があつた。その繪に、どこの神社であつたか知らぬが、こんな瑞垣があつたと思ふ。社殿の緣には、ねんねこ絆纏の中へ赤ん坊を負つて、手拭の鉢卷をした小娘が腰を掛けて、寒さうに體を竦めてゐる。純一は拜む氣にもなれぬので、小さい門を左の方へ出ると、溝のやうな池があつて、向うの小高い處には常磐木の間に葉の黃ばんだ木の雜つた木立がある。濁つてきたない池の水の、所々に泡の浮

いてゐるのを見ると、厭になつたので、急いで裏門を出た。

藪下の狹い道に這入る。多くは格子戸の嵌まつてゐる小さい家が、一列に並んでゐる前に、賣物の荷車が止めてあるので、體を横にして通る。右側は崩れ掛つて住まはれなくなつた古長屋に戸が締めてある。九尺二間といふのがこれだなと思つて通り過ぎる。その隣に冠木門のあるのを見ると、色川國士別邸と不恰好な木札に書いて釘附にしてある。妙な姓名なので、新聞を讀むうちに記憶してゐた、どこかの議員だつたなと思つて通る。それから先きは餘り綺麗でない別莊らしい家と植木屋のやうな家とが續いてゐる。左側の丘陵のやうな處には、大分大きい木が立つてゐるのを、ひどく亂暴に刈り込んである。手入の惡い大きい屋敷の裏手だなと思つて通り過ぎる。

爪先上がりの道を、平になる處まで登ると、又右側が崖になつてゐて、上野の山までの間の人家の屋根が見える。ふいと左側の籠塀のある家を見ると、毛利某といふ門札が目に附く。純一は、おや、これが鴎村の家だなと思つて、一寸立つて駒寄の中を覗いて見た。

千からびた老人の癖に、みづみづしい青年の中にはいつてまごついてゐる人、そして愚痴と厭味とを言つてゐる人、竿と紐尺とを持つて測地師が土地を測るやうな小說や脚本を書いてゐる人の事だから、今時分は苦蟲を咬み潰したやうな顏をして起きて出で、臺所で炭薪の小言でも言つてゐるだらうと思つて、純一は身顫をして門前を立ち去つた。

四辻を右へ坂を降りると右も左も菊細工の小屋である。國の芝居の木戸番のやうに、高い臺の上に胡坐をかいた、人買か巾着切りのやうな男が、どの小屋の前

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

にもゐて、手に手に繪番附のやうなものを持つてゐるのを、往來の人に押し附けるやうにして、うるさく見物を勸める。まだ朝早いので、通る人が少い處へ、純一が通り掛かつたのだから、道の兩側から純一一人を的にして勸めるのである。外から見えるやうにしてある人形を見ようと思つても、純一は足を留めて見ることが出來ない。そこで覺えず足を早めて通り拔けて、右手の廣い町へ曲つた。

時計を出して見れば、まだ八時三十分にしかならない。まだなかなか大石の目の醒める時刻にはならないので、好い加減な横町を、上野の山の方へ曲つた。狹い町の兩側は穢ない長屋で、鹽煎餅を燒いてゐる店や、小さい荒物屋がある。物置にしてある小屋の開戸が半分開いてゐる爲めに、身を横にして通らねばならない處さへある。勾配のない溝に、芥が落ちて水が淀んでゐる。血色の惡い、痩せこけた子供がうろうろしてゐるのを見ると、いたづらをする元氣もないやうに思はれる。純一は國なんぞにはこんな哀な所はないと思つた。

曲りくねつて行くうちに、小川に掛けた板橋を渡つて、田圃が半分町になり掛かつて、掛流しの折のやうな新しい家の疎に立つてゐる邊に出た。一軒の家の横側に、ペンキの大字で樂器製造所と書いてある。成程、こんな物のあるのも國と違ふ所だと、純一は驚いて見て通つた。

ふいと墓地の横手を谷中の方から降りる、田舍道のやうな坂の下に出た。灰色の雲のある處から、ない處へ日が廻つて、黄いろい、寂しい暖みのある光がさつと差して來た。坂を上つて上野の一部を見ようか、それでは餘り遲くなるかも知れないと、危ぶみながら佇

立してゐる。

さつきから坂を降りて來るのが、純一が視野のはづれの方に映つてゐた、書生風の男がちき傍まで來たので、覺えず顏を見合せた。

「小泉ぢやあないか。」

先方から聲を掛けた。

「瀨戸か。出し拔けに逢つたから、僕はびつくりした。」

「君より僕の方が餘つ程驚かなくちやあならないのだ。何時出て來たい。」

「ゆうべ着いたのだ。矢つ張君は美術學校にゐるのかね。」

「うむ。今學校から來たのだ。モデルが病氣だと云つて出て來ないから、駒込の友達の處へでも行かうと思つて出掛けた處だ。」

「そんな自由な事が出來るのかね。」

「中學とは違ふよ。」

純一は一本參つたと思つた。瀨戸達人とはY市の中學で同級にゐたのである。

「どこがどんな處だか、分からないから爲方がない。」

純一は厭味氣なしに折れて出た。瀨戸も實は受持教授が展覽會事務所に往つてゐないのを幸に、腹が痛いとか何とか云つて、ごまかして學校を出て來たのだから、今度は自分の方で氣の毒なやうな心持になつた。そして理想主義の看板のやうな、純一の黑く澄んだ瞳で、自分の顏の表情を見られるのが、頗る不愉快であつた。

此時十七八の、不斷着で買物にでも行くといふやうな、廂髪の一寸愛敬のある娘が、袖が障るやうに二人の傍を通つて、純一の顏を、氣に入つた心持を隱さず

に現したやうな見方で見て行つた。瀧戸は其娘の肉附の好い體をちつと見て、慌てたやうに純一の顏に視線を移した。

「君はどこへ行くのだい。」

「路花に逢はうと思つて行つた處が、十時でなけりやあ起きないといふことだから、此邊をさつきからぶらぶらしてゐる。」

「大石路花か。なんでもひどく無愛想な奴だといふことだ。矢張君は小說家志願でゐるのだね。」

「どうなるか知れはしないよ。」

「君は財産家だから、なんでも好きな事を遣るが好いさ。紹介でもあるのかい。」

「うむ。君が東京へ出てから中學へ來た田中といふ先生があるのだ。校友會で心易くなつて、僕の處へ遊びに來たのだ。其先生が大石の同窓だもんだから、紹介狀を書いて貰つた。」

「そんなら好からう。隨分話のしにくい男だといふから、ふいと行つたつて駄目だらうと思つたのだ。もうそろそろ十時になるだらう。そこいら迄一しよに行かう。」

二人は又狹い横町を抜けて、幅の廣い寂しい通を横切つて、純一の一度渡つた、小川に掛けた生木の橋を渡つて、千駄木下の大通に出た。菊見に行くらしい車が、大分續いて藍染橋の方から來る。瀧戸が先へ立つて、ペンキ塗の柱にゐで井病院と假名違に書いて立てある、西側の横町へ這入るので、純一は附いて行く。瀧戸が思ひ出したやうに問うた。

「どこにゐるのだい。」

「まだ日蔭町の宿屋にゐる。」

「それぢやあ居所が極まつたら知らせてくれ給へよ。」

瀬戸は名刺を出して、動坂の下宿の番地を鉛筆で書いて渡した。

「僕はここにゐる。君は路花の處へ入門するのかね。盛んな事を遣つて盛んな事を書いてゐるといふぢやないか。」

「君は讀まないか。」

「小説はめつたに讀まないよ。」

二人は敷下へ出た。瀬戸が立ち留まつた。

「僕はここで失敬するが、道は分かるかね。」

「ここはさつき通つた處だ。」

「それぢやあ、いづれ其内。」

「左様なら。」

瀬戸は團子坂の方へ、純一は根津權現の方へ、ここで袂を分かつた。

貳

二階の八疊である。東に向いてゐる、西洋風の硝子窓二つから、形紙を張つた向側の壁まで一ぱいに日が差してゐる。この袖浦館といふ下宿は、支那學生なんぞを目當にして建てたものらしい。此部屋は近頃まで印度學生が二人住まつて、籐の長椅子の上にごろごろしてゐたのである。その時廉い羅甝の敷いてあつた床に、今は疊が敷いてあるが、南の窓の下には記念の長椅子が置いてある。

テエブルの足を切つたやうな大机が、東側の二つの窓の間の處に、少し壁から離して無造作に据ゑてある。何故窓の前に置かないのだと、友達が此部屋の主人に問うたら、窓掛を引けば日が這入らない、引かなけれ

ば目ぶしいと云つた。窓掛の白木綿で主人が濡手を拭いたのを、女中が見て亭主に告口をしたことがある。亭主が苦情を言ひに來た處が、もう洗濯をしても好い頃だと、あべこべに叱つて恐れ入らせたさうだ。此部屋の主人は大石狷太郎である。

大石は今顔を洗つて歸つて來て、更紗の座布團の上に胡坐をかいて、小さい藥鑵の湯氣を立ててゐる火鉢を引き寄せて、敷島を吹かしてゐる。そこへ女中が膳を持つて來る。その膳の汁椀の側に、名刺が一枚載せてある。大石はちよいと手に取つて名前を讀んで、默つて女中の顔を見た。女中はかう云つた。

「御飯を上がるのだと申しましたら、それでは待つてゐると仰しやつて、下に入らつしやいます。」

大石は默つて頷いて飯を食ひ始めた。食ひながら座布團の傍にある東京新聞を擴げて、一面の小說を讀む。これは自分が書いてゐるのである。社に出てゐるうちに校正は自分でして置いて、これ丈は毎朝一字殘さずに讀む。それが非常に早い。それから大張自分の擔當してゐる附錄にざつと目を通す。附錄は文學欄で塡めてゐて、記者は四五人の外に出でない。書くことは、第一流と云はれる二三人の作の批評丈であつて、其他の事には殆ど全く容喙しないことになつてゐる。大石自身は其二三人の中の一人なのである。飯が濟むと、女中は片手に膳、片手に土瓶を持つて起ちながら、かう云つた。

「お客樣をお通し申しませうか。」

「うむ、來ても好い。」

返事はしても、女中の方を見もしない。隨分そつけなくして、笑談一つ言はないのに、女中は飽くまで丁寧にしてゐる。それは大石が外の客の倍も附屆をする

からである。窓掛一件の時亭主が閉口して引つ込んだのも、同じわけで、大石は下宿料をきちんと拂ふ。時時は面倒だから來月分も取つて置いてくれいなんぞと云ふことさへある。袖浦館の上から下まで、大石の金力に刃向ふものはない。それでゐて、着物なんぞは隨分質素にしてゐる。今着てゐる銘撰の綿入と、締めてゐる白縮緬のへこ帶とは、相應に新しくはあるが、寢る時も此儘寢て、洋服に着換へない時には、此儘でどこへでも出掛けるのである。

大石が東京新聞を見てしまつて、傍に疊ねて置いてある、外の新聞二三枚の文學欄丈を拾讀をする處へ、さつきの名刺の客が這入つて來た。二十二三の書生風の男である。縞の綿入に小倉袴を穿いて、羽織は着てゐない。名刺には新思潮記者とあつたが、實際此頃の眞面目な記者には、かういふ風なのが多いのである。

「近藤時雄です。」

鋭い目の窪んだ、鼻の尖つた顏に、無造作な愛敬を湛へて、記者は名告つた。

「僕が大石です。」

目を擧げて客の顏を見た丈で、新聞は手から置かない。用があるなら、早く言つてしまつて歸れとでも云ひさうな心持が見える。それでも、近藤の顏に初め見えて居た微笑は消えない。主人が新聞を手から置くことを豫期しないと見える。そしてあらゆる新聞雜誌に肖像の載せてある大石が、自分で名を名告つたのは、全く無用な事であつて、その無用な事をしたのは、特に恩惠を施してくれたのだ位に思つてゐるのかも知れない。

「先生。何かお話は願はれますまいか。」

「何の話ですか。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.